

ミドリ公園に行く途中の藪で、蛇を踏んでしまった。  
ミドリ公園を突ききって丘を一つ越え横町をいくつか過ぎたところに私の勤める数珠屋「カナカナ堂」がある。カナカナ堂に勤める以前は女学校で理科の教師をしていた。教師が身につかずに四年で辞めて、それから失業保険で食いつないだ後カナカナ堂に雇われたのである。

カナカナ堂では、店番をする。仕入れやお寺さんの相手は店主であるコスガさんが行い、数珠づくりはコスガさんの奥さんが行う。雇われた、というほどのことはなく、つまりはただの店番である。

蛇を踏んでしまっただけから蛇に気がついた。秋の蛇なので動きが遅かったのか。普通の蛇ならば踏まれまい。

蛇は柔らかく、踏んでも踏んでもきりが無い感じだった。

「踏まれたらおしまいですね」と、そのうちに蛇が言い、それからどろりと溶けて形を失った。煙のような霧もやのような曖昧なものが少しの間たちこめ、もう一度蛇の声で「おしまいですね」と言ってから人間のかたちが現れた。

「踏まれたので仕方ありません」

今度は人間の声で言い、私の住む部屋のある方角へさっさと歩いていってしまった。

人間のかたちになった蛇は、五十歳くらいの女性に見えた。

カナカナ堂に着くとコスガさんがシャッターを開けているところで、奥ではコスガさんの奥さんのニシ子さんがコーヒートを挽いていた。

「今日は甲府まで行くので、よかつたらサナダさんも行きませんか」とコスガさんに言われた。ときどきコスガさんのパンと一緒に乗って数珠の卸しに行くことが今までもあったが、ごく近い場所ばかりだった。甲府というのは、遠い。

このところニシ子さんは浄土宗の数珠をいくつもいくつも作っていた。前の日には、ようやく完成したその二百の数珠を箱に入れ包装したのである。どうやらそれを届けに

行くらしかった。

「願信寺から少し足を伸ばすと石和温泉もあるし」コスガさんはそんなことを言った。「ニシ子も一緒に行くか。店休みにして」

コスガさんは、すぐにこんなことを言う。ニシ子さんは答えずに笑っていた。ニシ子さんは六十過ぎだが、白髪も少なく、八歳年下だというコスガさんよりも余程若く見える。コスガさんが若い頃修業にと入った京都の老舗の数珠屋の奥さんで、数珠も作るし店もきりまわすし、その店の若旦那があまり店に寄りつかず外で遊んでばかりいるのに朝から晩まで休む間もなく切り盛りをしていたニシ子さんにコスガさんが横恋慕して、結局数年後修業を終えたコスガさんがニシ子さんを口説いて駆け落ちをしたという昔話を聞いたのは、店に勤めはじめてから数週間後だった。この駆け落ち話を店に来るたいの客——主にそれは得意先のお寺さんであるのだが——は知っていて、いまだに「ご夫婦仲のいいことでよろしいなあ」と軽口を叩かれたりする。コスガさんはそれに対しては「なんまんだぶなんまんだぶ」などと口の中で唱え、ニシ子さんは黙って微笑んでいる。

こういう事情があるので、ニシ子さんの数珠づくりの腕は関東では一番と言われている。

るにもかかわらず、カナカナ堂は辺鄙なこの土地でほそぼそと商売を続けているのであった。

「蛇を踏んでしまいました」

寺からの帰り道、高速道路のサービスイリアでアイスコーヒーを飲みながら私が何気なく言うのと、コスガさんは驚いたように「あれっ」と叫んだ。

「その蛇、それからどうしたかね」

両切りのピースをくわえながら、コスガさんはゆっくりと禿げあがった額をてのひらで撫であげた。

「それから歩いて行ってしまった」

「どこに」

「さあ」

午後遅くのレストハウスには西日が射し、窓の外の車の音が遠く近く聞こえていた。

願信寺の住職は骨董に興味があり、信楽だの志野だのの焼き物や古い棚を庫裏いっぱい飾っていた。ひとつひとつのものの因縁話を合計三時間にわたって聞かされた。住職

にどこことなく似た顔の大黒さんが昼御飯にと蕎麦を運んできてくれる合間にも、因縁話はどうとうとつづいた。蕎麦召し上がれ、のびてしまいますよ、と大黒さんが言っても切れ目ない話のどこで蕎麦を食べていいのかわからなかった。コスガさんはしかし住職の話にふんふん頷きながら、いつの間にか蕎麦をたいらげていた。どうにかしてコスガさんの真似をしようとしたが、私の方の蕎麦はちっとも減らないのであった。やっと住職が蕎麦にかかって少しの沈黙が訪れたときに、慌てて蕎麦猪口を握りすすりこもうとすると、ああその蕎麦猪口はね、と始まってしまった。箸にも蕎麦猪口にも湯飲みにも、そしてその湯飲みの載っている茶托にも、茶托の載っている机にも、机に向かって座っている私の敷いている座布団の生地にも、すべての道具に因縁話があるようだった。

江戸時代に首を斬られた罪人と親孝行で蔵を建てた男と選挙で町長になったやり手と相撲の谷町になるくらい金持ちだったのが掘っ建て小屋にも住めなくなつた零落者と根性悪で火傷をした女と畑から金貨を掘り出した犬と病人用の特殊な吸い飲みの発明で出世した未亡人の話を全部聞きおえると、コスガさんは落ちついた様子で二百個の数珠をバンの後部から取り出してきて住職の前に並べ、代金を受け取ると丁寧に領収書を切って渡した。領収書には毛筆で漢数字が書かれていた。カナカナ堂の書き物はすべて二

シ子さんの手による達者な墨書なのである。

「ところでカナカナ堂さん、蛇にかんする話は知らんかね」と領収書をたたみながら住職が言ったときに、大黒さんが呼びにきた。法事があるようだった。

「このごろ蛇が多くてな。このあたりも開けてきたんで住む場所がなくて寺にやって来るんじゃろ」コスガさんと私の目の前で黒い半袈裟を脱ぎながら、住職はつぶけた。

「蛇は化けるからねえ」

青く光る袈裟を頭からかぶり、金の帽子をつけると、住職はすっぱいものを食べたときのような表情になって、笑った。コスガさんについて深くお辞儀をしながら、大黒さんに見送られて寺を出た。そのことがあったのでコスガさんに蛇の話をしたのであった。

「サナダさん、それどんな蛇だったかね」

ダンブカーの警笛が汽船の霧笛のように聞こえる。海辺のレストハウスにいるような感じがした。

「中くらいの蛇でした。柔らかくて」

コスガさんは少し頼りないような表情になったが、それ以上何も言わず、ふたたび広額をてのひらで撫であげてから、席を立った。バンに乗るとコスガさんはラジオをつ

けた。株式市況が終わり、ポルトガル語講座が始まるころに私はうとうとして、もう蛇のことは忘れていた。カナカナ堂については、英会話の途中であった。

夜のミドリ公園を抜けて部屋に戻ると、部屋はさっぱりと片づいていて、絨毯の真ん中に五十歳くらいの見知らぬ女が座っていた。

さては蛇だなと思った。

「おかえり」女はあたりまえの声で言った。

「ただいま」返すと、女は立ち上がって作りつけの小さな炊事コーナーに立っていき、鍋の蓋をあけていい匂いをさせた。

「ヒワちゃん好きなのつくね団子を煮たやつよ」女はいそいそとダイニングテーブルの上を台布巾で拭き、箸や茶碗を並べた。

いつも私が座る場所に、客用と私用の食器を取り違えることもなく、ごく自然に並べている。前からこの部屋に住みついてきたものみたいなのである。つくね団子といんげんを煮たものやおからや刺身が見る間に並べられた。コップも出してきてビールの蓋を栓抜きで開ける。

「乾杯しましょうか、たまには」そう言って女は私の席の横に座った。言われるままに乾杯をしてビールを飲み下すと、喉がもつとビールを欲しがってすぐにコップは空になった。女がつぎ足すかと思ったが、何もしない。つがれることが嫌いなのを知っているのだろうか。

「ああおいしい」女も言って自分のコップにつぎ足し、それを見た私もまた飲み干してつぎ足し、じきに瓶は空っぽになった。

「もう二本冷やしてあるのよ」女はつくねを皿に取りながら言う。

気味が悪かったが、つくねがおいしそうなので私も皿に取った。女はどんどん食べる。少しだけ箸でつついて汁が出たので、つい食べた。自分でつくったような味だった。つくねを食べてはビールを飲み、いんげんを食べてはまたビールを飲んだ。しかし刺身にはどうしても箸をつけられなかった。蛇が並べた刺身かと思うと、どうにも気味が悪かった。女は醬油と山葵わさびをたっぷりつけて刺身もどんどん食べる。

「今日は仕事遅かったのね」

「甲府に行ったから」答えようと思っていなかったが、ビールに酔ってゆるんだようだった。

「あなた何ですか」つづけて、聞いた。するりと聞くことができた。

「ああ。わたし、ヒワ子ちゃんのお母さんよ」

女は何でもなく答え、冷蔵庫まで行ってビールをもう一本出した。栓抜きでビールの蓋をとんとん叩き、それから栓を抜いた。私のコップと女のコップにビールを均等につぎ、泡をたくさん立たせた。

「え」

母は故郷の静岡に健在だった。父も健在である。弟が二人、地元地元の大学と高校に在学している。母の顔はテレビで母親役をやることの多いなんとかいう女優の顔に似た日本人の平均的な顔である。女は西洋的な彫りの深い顔だった。睫毛がひどく長い。頬骨が高く、目や口のまわりの皺が皮膚の薄さを感じさせた。

急に心配になって実家に電話をかけるために立ち上がった。番号がうまく思い出せなくて、二回かけそこねた。夢の中でうまく電話をかけることができないうちに似ていた。「もしもし」三回目で母が出て、電話の向こうで「あらヒワ子ちゃん」などと言う。

「もしもし」

「どうしたの」

「いや、元気かと思つて」

「元気よ。そっちは」

「元気」

「どうしたの」

あまり電話好きではない質なので、たまの日曜くらいにしか電話をかけない。向こうもそれは承知していて、そのたまの電話も二分くらいで終わってしまう。

「父さんやなんかも元気」

「べつに。普通だけど。どうしたの」

「どうもしないけど」

うやむやのうちに電話を切った。女は電話をかける私を見もしないでぱくぱくと食べたり飲んだりしている。

テーブルに戻ると食べ物はあらかたなくなっていて、女は三本目のビールを開けながら頬杖をついた。

「ヒワ子ちゃんはどうして教師をやめたの」

女はもう何もつままずにビールだけを飲みながら訊いた。母の声を聞いたばかりで隙

ができていた。訊かれて、気味が悪いとあいかわらず思いながら、どうせ気味の悪いものなら答えてもいいという気分になった。

「嫌いだったの」

「何が」

「教えること」

「ほんとう」

「……………」

「違うんじゃないの」

「違うかもしれない」

「ほんとはどうだったの」

女はさらにビールを飲んで、さらにつぎ足した。女の腕に鳥肌がたっていた。鳥肌のたった腕の皮膚も薄く白かった。

「消耗したからかもしれない」

教師に対して生徒が何か求めてくることは少なかったが、求められているような気がしてきて、求められないことを与えてしまうことが多かった。与えてからほんとうにそ

れを自分が与えたいのか不明になって、それで消耗した。与えるという気分も嘘くさかった。

「もう寝るわ」

突然女が言つて、食べたものを片づけもしないで、部屋に一つだけある柱にからまつた。どういふ仕掛けになっているのか、女の体は薄くなって柱にびたりと貼りつき、するすると柱にからまりながら天井に登つた。天井に登つてしまふとそこで落ちつき、いつの間にか蛇に戻つた。天井に描かれた蛇のようなかたちになって、目を閉じた。それからはいくら話しかけても長い棒を持ってきてつづいても、動かなかった。

朝になつても蛇は同じところにじつとしていた。不用心かとも思つたが、捨ててもせずそのまま置き、カナカナ堂に出勤した。

ちようどまたコスガさんはシャッターを開けているところだった。遠くで鉄砲を撃つような音がしている。

「威銃だね」何も聞かないうちにコスガさんが言つた。「サナダさん知つてるかね」

知らないと答えると、コスガさんは威銃のことを説明してくれた。田んぼに来る鳥を

追い払うために撃つ爆音だけの銃のことなのであつた。長さが八十センチほどの銃であるということだった。

「ここに店を開いた当時は猪なんかも出て、今よりももっと銃音が激しかったよ。もう朝早くからおんどおんで」

都会で育つたコスガさんはその音を知らず、最初のうちはニシ子さんを追いかけてきたニシ子さんの夫が自分めがけて撃つ銃の音に思えてならなかつたと、笑いながら話した。店を開いたころにはニシ子が京都の家を出てから三年以上もたつていたのにね、そうコスガさんは言い、両切りピースに火をつけずにしばらくくわえていた。

「演習の音かと思つてました」私が言うと、コスガさんは、え、という顔をした。

「自衛隊の」重ねて言うと、コスガさんはピースをくわえたまま口を「ああ」のかたちにした。ピースはコスガさんのうわくちびるに貼りついたままくちびると共に上方に移動した。

「戦争の練習ね。練習は大事だよ。大事大事」コスガさんが言い、私は何と答えていいのかわからずに少し首を横に振つた。だいたいいい、大事なものはあり、貸し金庫おろ、コスガさんが小さな声で歌いだし、その歌に聞き覚えはあつたがどこで聞いた歌な

のか思い出せない。威銃がぼんぼんと軽い音で何回か鳴った。

店に入ると空気が冷たかった。ニシ子さんの姿がない。ときどきニシ子さんは店を休むので、きっと今日も休みなのだろうと思った。足の親指が痛くなるのである。ニシ子さんは痛風持ちなのであった。いつもニシ子さんがしているように品物にはたきをかけた店の前に打ち水をし、コーヒ―はニシ子さんでないといれてはいけないような気がしたので日本茶を二杯ぶんいれ、それから机に向かつて座り、何もすることがないのでお茶を飲んだ。

そのうちに電話が鳴りだしてメモを取ったり在庫を調べたり知らぬ間に時間がたつようになり、外回りから帰ったコスガさんが今日三杯目の日本茶を飲むころには日が傾きかけていた。一人で店番をしているときに蛇のことを考えなくてもなかつたが、考えようとすると考えが散り散りになってどこかにいつてしまう。一回だけ、宵泉寺という得意先のお寺さんからの電話の途中に「へび」という言葉が聞こえたように思えてびっくりしたが、「かたびら」という言葉の途中がかすれてへびと聞こえたのであった。しかしコスガさんは帰ったとたんに蛇のことをもちだした。

「サナダさんね、あの蛇の話」注文品を帳簿に書き入れながら、コスガさんは言った。

「追い出さないよ。来たら」

「来たらって」

「だから、蛇」

顔をあげてコスガさんを見ると、コスガさんも顔をあげて私を眺めた。眺めて、すでに私のところに蛇が来ていることがわかってしまったらしかつた。

「駄目か」

「はら」

「どうしても駄目か」

コスガさんは強いような言葉を言いながら、また「だいいだいい」と、今朝と同じ歌を鼻の先で歌いはじめた。まのびした気持ちなのかせつば詰まった気持ちなのか、コスガさんの場合さっぱりわからない。どちらでもあるのかもしれない。今日いちにち蛇のことを棚上げしてのんびり仕事なんぞしていたことを後悔する心もちになったとたんに、コスガさんの歌っている歌をどこで聞いたのか思い出した。駅前の信用金庫が地区の祭りのときに出す山車から流れる歌だった。どうやって作詞作曲したのか、演奏したのか、テープにエンドレスで吹き込まれた「だいいだいい」の歌は、山車がねり



歩く間じゅう流れつづけていて、祭りの日も休まず店を開けていたカナカナ堂の奥にぼんやりと座りながら、「だいたいじいじい」が頭の中にしみ込むのをどうにか阻止しようとした覚えがあった。しかし「だいたいじいじい」は、しつかりとしみ込んでしまっていた。

「追い出しなさいよ」

「そうですか」

「できればさ」

「できますか」

コスガさんは答えず額をてのひらで撫であげた。お札を麻の中着袋にしまい、レジに鍵をかけた。ガラスケースの中の仏像に向かって「なんまんだぶなんまんだぶ」と言い、ガスの元栓を締め、盛り塩の皿を洗面所の横に置いた。最後にシャッターを閉めて電気を消した。

「よくわからないけどね、しよわなくていいものをわざわざしよわくことはないでしょ」

コスガさんはそう言うが、どんなものをしよってどんなものをしよわなくていいのか、しよってみるまでは分からないような気がした。しかしコスガさんには言わなかった。

「いないだろうと思ったりいるだろうと思ったりしながら部屋に帰り、すでに蛇が考える真ん中にきてしまっているのであつた。

蛇はいた。女の姿になっていた。

「ヒワ子ちゃんおかえり」と言われると、何年間も言われてきたようになって、

「ただいま」と答える。

女はそれ以上何も言わなかった。風呂に入り、洗濯をした。女の前で服を脱ぐのはいやだったので、狭い風呂場で着替えをした。湿気がうましく取れないままパジャマを着て出ると、女は早速ビールを抜き「さあさあ」と言った。

「いらぬ」と言おうとして、しかしビールを見ると一杯だけ飲んでしまふ。飲んでしまふとおかずに箸がのび、もう一杯ビールをつぎ、見ると女はすっかりくつろいでいた。

「ねえ覚えてる、ヒワ子ちゃん」女は目のまわりをぼろと赤くさせて話しかけた。

「ヒワ子ちゃんが木から落ちたときのこと」

木から落ちた覚えなどなかった。しかし女はつづけた。

「お隣のゲンちゃんが、ヒワ子ちゃんのおかあさん、ヒワ子ちゃんが落ちちゃったよ

「、って叫んだんであたしはびっくりして腰が抜けそうになった」  
宙を睨む目つきになって、女は声を少し大きくした。

「行ってみるとヒワ子ちゃんは木の下に座ってて、だいじょうぶって聞くとだめって答えたわよ。だめって、ヒワ子ちゃんらしいわね」

そんな記憶はどこを探してもなかった。

「それ、違う人なんじゃないですか」

「違わないわよ、あたしヒワ子ちゃんのお母さんだから間違いないし」

「私の母は静岡にいます」腹が立った。しかし女は涼しい顔である。

「それはそうだけど、でもあたしだってヒワ子ちゃんのお母さんなのよ」

「ばかな」

「ヒワ子ちゃんの知らないこと、あたしいっぱい知ってるのよ」

そう言われて、ぞっとした。

女の皮膚がぬらりと光って、たいそう蛇らしい様子になった。今のこの今、私はこの女をしょってしまった、と思った。今までも何回かこういった気分になったことがあのような気がしたが、それが具体的にどんな場面だったのかは思い出せなかった。女は

愛しそうな視線で私を眺めている。

「ヒワ子ちゃん、あたしヒワ子ちゃんが大事だわ」ねとねとした声で言い、女は丸くなった。丸くなるととたんに蛇に戻って、天井に這い登った。登ってしまうとまた絵に描いたものようになって、押しても引いても取れない。

なるべく蛇から離れたところにいたくて、布団を部屋の隅に敷いた。寝つかれないかと思つたが、じきに寝つき、朝まで一回も起きなかった。

「サナダさん、今日は声が小さいわね」

お茶を飲みながら伝票の整理をしていると、後ろからニシ子さんが言う。ニシ子さんはさつき店に出てきたばかりでまだ私とは何も会話を交わしていないのに、声が小さいと言う。ときどきニシ子さんはそんなふうに言うことがあって、たとえば出勤したばかりの朝一番に「ゆうべはサナダさん食べすぎたわね」だの「今日はいちにち気が塞ぐわよ」だの言うのである。ニシ子さんの言うことはよく当たる。今日の私は声が小さく目が大きく開かない。

「おはようございます」振り向いて言うと、ニシ子さんは笑った。

「あらやっぱり小さい」

コスガさんが音をたてながら帰ってきた。音をたてているのはコスガさんが手に持った荷物である。荷物は布で覆われている。陳列ケースのガラスの上に荷物を載せて覆いを取ると、箱があらわれた。箱の中で何かがしきりに動く音がしているのであった。

「何ですか」ニシ子さんが聞くと、コスガさんは指をくちびるに当てて「しっ」と言った。

「あれ」

「ああ、あれ」

聞かないふりをして伝票をつけながら背後を窺ったが、もうそれ以上二人は何も言わなかった。ピースの匂いがして、コスガさんのため息が聞こえた。

昼になるとニシ子さんが天井を取ってくれて、三人で店の奥の小部屋に座って食べた。月に一回くらいカナカナ堂は天井の上をふるまってくれる。上の天井には海老が一匹とぬか漬の茄子が多くつく。

コスガさんは今日回ってきたお寺さんの話をした。寺を継いでほしい息子さんがアメリカに行ってしまうて困っているという。アメリカで古着を買いつけてきて日本で売り

さばく。古着など今の日本で売れるのかと聞くと、なんでも稀少価値のあるジーンズで、一本数十万円で売れることもあるのだそうだ。

「若い人の間でそういうのはやっているの？」コスガさんに聞かれたが、知らないの「さあ」と言うと、コスガさんは不思議そうな顔をする。

「そういうえばサナダさんはこのごろの若い人と違う服着てるね」

コスガさんの言うコノゴロノワカイヒトという人たちがどんな人を指すのかわからないので黙っている、ニシ子さんがたしなめた。

「昔のように、四条河原町を歩けば知ってる人に会うっていう時代じゃないんですよ」

コスガさんは「まあねえ」と答えて、海老をばりばりと食べた。私は蛇のことを思い出していた。コスガさんやニシ子さんと話をするときのような、最初から壁を隔てたような遠い感じが蛇にはなかった。コスガさんの言うコノゴロノワカイヒトと話をするときにも壁はあって、たとえば私が教師をしていたときの生徒だとか同僚だとか、それを言うなら母にも父にも弟に対しても、薄かったり厚かったりするが壁というものはあって、壁があるから話ができるともいえるのであった。

蛇と私の間には壁がなかった。

天井はいつものように腹にもたれ、夕方まで私は声が小さく気分がすぐれなかった。

ミドリ公園を歩きながら、曾祖父のことを思い出した。曾祖父という人はお百姓で、五反の田んぼと茶畑を持っていた。ある日出奔した。しばらく音沙汰がなく、曾祖母は五人の子供をかかえて野良仕事を一人でこなした。三年後の春に帰り、曾祖母との間にどんな話がなされたかはわからないが、結局何事もなかったかのように元のさやに納まった。つつがなく年月は過ぎたが、曾祖母が死に五人の子供たちが育ちさらに孫が生まれ体がきかなくなつてから、突然出奔していったときのことを話すようになった。

曾祖父は鳥と暮らしていたのである。

鳥は女の姿をしてある秋の日に曾祖父を誘いに来たのであった。かぐわしい香りをさせた手のきれいな女に魅入られて、曾祖父は家を捨てた。二年間そのまま遠い土地で暮らし、しかし三回目の冬に女は曾祖父を疎んじはじめたのであった。

「鳥の本性が出たんだね」曾祖父は語ったそうである。

「おまえのような甲斐性のない男ではわたしに卵を産ませられない、そう鳥は言うようになった」そんなふうに曾祖父は語ったのである。

私は巢をつくりたいんだよ、そう言つて鳥はばたばた飛んでいってしまった。それでわしは家に帰つた」

その話を母から聞いたのは中学生くらいのもので、へんな寓話だと思つた。教訓のない寓話だと思つたのである。今思い出しても、教訓を引き出すことができない。家族を捨てて碌でもない女についていっても身の破滅が待っているだけであるか。しかしそれにしては曾祖父は女との暮らしを愉しむすぎたようだった。女はわからないものであるか。それにしては女の言うことは真つ当すぎるようだった。明治時代はかく父権が強くなは出ていった男が帰つても責めることすらできなかったゆえに女性はもつと自我に目覚めねばならぬのか。それにしては曾祖母はそれほど曾祖父におしひしがれて生きてきたようには聞こえなかった。

寓話ではなく実際の話だとしても、今の私とは違う話だと思つた。それでも鯨に食われそうになつた人間がくじらに飲み込まれた人間の話を思い出すような感じで、思い出したのである。

ミドリ公園の枯れ葉がびゅうと舞つた。夜も近いというのに、子供が何人も出て大声をあげている。自転車に乗つては風をきつて公園の遊歩道を走り回っている。後ろから

何台もそういう子供の乗る自転車が私を追い越していった。そのたびに髪がなびき、子供と自転車のつくる鋭い気配が通りすぎた。

喉の下にぜいぜいするかたまりが溜まっていくような気分だった。

「あなたはいったい何ですか」開口一番に聞いた。酒や食べ物勧められてからでは聞けない。急いで聞いた。

「ヒワ子ちゃんのお母さんに決まってるでしょう。何回言わせるの」

女は枝毛かなにかを調べながら答えた。いつもは上げている髪を下ろしている。長い髪である。髪を下ろした女は少しふけて見えた。

「意味がわかりません」

「わからないですって」

女は口を大きく開けた。蛇なので舌が二股に割れているかと思ひ、一瞬目をそむけたが、べつに割れてはいなかった。ごく普通の人間の舌だった。

「ヒワ子ちゃんはいつもそうやって知らないふりをするのね。あんまり感心しないわ」  
そう言われても、わからないものはわからない。

「あたし、今日はこのへん散歩してみたの。いいとこね」口調を変えて女は言った。

「そうですね」

「ちよっと子供が多いけど。最近の子供ってしつけが悪いわね」

「そうですか」

「山羊がいたわよ。成田さんというおうち。ヒワ子ちゃん知ってた？」

そんな会話を交わしているうちに、また酒になって食事になってしまった。食べて飲みながら、女が「ほら知らないふり」と心の中で笑っているような気がして何度でも女を見た。実際に女は笑いながら酒をつぎ汁物を温めた。女は美しく、私は女の顔が好きだった。

蛇が来てから二週間が過ぎ、カナカナ堂は棚卸しの時期になった。春と秋にカナカナ堂は棚卸しをする。床から天井まである棚が売り場の裏に三列あり、その品物と売りの品物を、はじめからニシ子さんがつくったわら半紙のメモに書きつけていく。タガヤサン本メノウ仕立て十。本水晶一輪七。好文木十二。そんなふうにメモしていった紙をニシ子さんが受け取り、帳簿に書き込む。昔ふうのやり方である。

サナダさんはパソコン使えるかね、とコスガさんはときどき言うが、在庫管理にパソコンを使うほどカナカナ堂は大きな取り引きをしてないから、とニシ子さんが答えると、コスガさんがすぐにそうだねえと言つて話はおしまいになる。しかしまたしばらくするとコスガさんは、サナダさんパソコンで便利かねと言いだす。言いだすが、それきりだ。昼過ぎ、コスガさんがまた箱を持って帰った。

箱の中では何かがしきりに動いている。ニシ子さんが箱を倉庫に置きにいった。棚卸しは半分まで終わり続きは明日ということになったので、私はおやつのお菓子を買いに外に出た。コスガさんがついてくる。

「サナダさん、ちよつとそのへんでお茶でも飲むか。買い物はいいよ今日は」

駅前の喫茶店でコスガさんと向かい合い、前にもこういうことがあったと思つたら、甲府の寺の帰りの高速道路サービスエリアだった。

「まだいるかい、蛇」予想どおりコスガさんが訊いた。

「ええまあ」

蛇は居ついていた。夜部屋に帰ると食事の支度ができているのが私は嬉しかったのだろうか。電気のついていない部屋がいやだと思つたことはなかったが、共に暮らし始め

てみるとなじんてしまうものである。

「今日は話があつて」コスガさんはそれ以上私の蛇のことを追及しなかった。そのかわりにこんなことを話した。

実はもう二十年も前からうちにも蛇がいる。ニシ子についてきたものらしくて、ニシ子の叔母だと名乗る。最初は邪魔だし気味も悪いしどうにか追い出そうとしたが、追いつたり夫婦仲がしっくりいなくなつたり怪我をしたり、いざ追い出そうとする態勢になるとそんなことがつづげさまに起こつた。お祓はらいをしてもらつたこともあつたが、祓はらう方も特に悪いものは憑よいていないなどと言う。祓はらつてもむろん消えない。そのうちにいることが自然になつて、いてもいなくても気にならなくなつた。ところがこのごろ蛇の死に際が近くなつたらしく、人間の姿をとれなくなつてきた。人間になつてもごく短い。蛇のままいて、蛇の嗜好を發揮する。小鳥や蛙を吞みだがる。今日も小鳥を買つてきてニシ子に渡した。ニシ子は何を思つているのか、もう蛇など捨ててしまえという言葉に頑固に首を横に振り、嬉々として蛇に生餌を与えている。こうなるとニシ子のことかわからなくなる。こわいような心もちになる。

コスガさんは額をてのひらで三回撫であげ、  
「こわいよ僕は」ともう一度言った。

こわいという言葉にコスガさんのどんな気持ちがあるのか、こわいと言われればこわいようにも思うし、蛇がこわいのかニシ子さんかこわいのか、そんなことはコスガさんにもわからないのだろうが、そうすると私は蛇に言われた「ヒワ子ちゃんはいつもそうやって知らないふりをするのね」という言葉を思い出してしまふのである。

喫茶店でコスガさんはそのあとホットケーキを頼み、私は洋梨のシャルロットを頼んだ。一時間ほどいて、またカナカナ堂に帰った。

女に肩を叩かれた。振り向くと女は頬ずりをしかけてくる。女の頬はひやつこかった。愛玩動物を抱きしめているときのような、または大きなものにすっぽりと覆われているような、満ちた気持ちになった。女は頬ずりをしながら私に両腕を巻きつける。巻かれた腕もひやつこく、女の指先は少し蛇に戻っているようでもある。蛇に戻っていたとしても、気味は悪くない。むしろ蛇であった方が心丈夫なのである。蛇ではない、女のまの姿のものが私を絡め巻き取っているとすれば、その方がよほど落ちつかない。女の

身長は私とまったく一緒で、女と私は対になったもののように胸をお互いの体に押しつけあう。

巻きつきながら、女が言った。

「ヒワ子ちゃん、蛇の世界はあたたかいわよ」

うんうんと頷くと、女はつづける。

「ヒワ子ちゃんも蛇の世界に入らない？」

いやともいいとも取れる首の振り方をして私は蛇の抱擁から静かに身をはがした。

蛇の世界にはそれほど魅力を感じなかった。私がそう考えていることは蛇にもわかっているのだろう、こんどは腕を巻きつけずに私の正面に座って膝をかかえた。

「ヒワ子ちゃんは何かに裏切られたことはある？」

誘うような目をして訊いた。

何かに裏切られるというからには、その何かにたいそう入り込んでいなければなるまい。何かにたいそう入り込んだことなど、はて、今までにあったらうか。

何人かの女や男との気持ちやからだのつながりだの、ある期間毎日通った場所での誰か彼かとの押し引きだの、幾つかのことを思い出したが、思い当たらない。ただ思い出

せないだけで知らずに忘れていようとしているのかとも考えるが、ものごころついてから知らずに忘れるくらいのことなら、たいそう入り込むとも言えぬほどの事柄だろう。

「ないような」

そう答えると、女は口を広げて笑った。

それから女が重ねて訊ねるか待ったが、もう何も訊ねない。訊ねず、天井にするりと登って私を見下ろした。

「ヒワ子ちゃんヒワ子ちゃん」としきりに呼びながら、蛇のかたちに戻った。蛇のかたちになっても、

「ヒワ子ちゃん」

そういう音が止まない。

蛇のたてる衣擦れみたいな摩擦音に混じって、「ヒワ子ちゃんヒワ子ちゃん」とも「シュルルルウシュルルルルウ」とも聞こえる音が鳴りつづけている。

強風の晩に聞こえるような、不思議な音だった。

カナカナ堂にいくと、ニシ子さんがぼんやりと座っていた。

打ち水もしてあり、盛り場もいつもより高く盛ってあり、店の中はきれいに磨きあげられていた。コスガさんはいない。

「おはようございます」

「ああ、サナダさん」

漂流してきてやつと陸に上がった遭難者のような声をニシ子さんは出した。何かをニシ子さんの足元にいる。気配がするのである。

「今日はお店、早く開けたのよ」ニシ子さんはぐったりしたまま言った。

「何時ごろですか」

「そうねえ、朝の四時ごろ」

えっ、という声を呑みこんで少し後じさった。後じさった拍子にニシ子さんの足の下に竹の籠が置いてあるのが見えた。気配はどうやらその中から漂ってくるらしい。

「なんだか眠れなくなつてねえ。このごろは夜明けが遅くなつてきたから、いつまでも暗くてつまらなかつたわ」

それではニシ子さんは午前四時にシャッターを開け、電灯を煌々と灯し、店の中をがさごそと動きまわっていたのだろうか。動くのに飽きると、じつと座って真つ暗な外を



見つめたりしていたのだろうか。

「コスガさんはもう出かけたんですか」

「さあ。今日はまだ見ないわねえ。まだ寝てるかもしれない。このごろよく寝るのよあの人。寝てばかりいて人間じゃなみたい」

いやに突き放した言い方をする。籠の中で、何かが動いた。

「あおう」

そう言うと、ニシ子さんが顔を上げた。ニシ子さんの顔の中で目が光っている。最初細く窄められていた目が次第に大きくふくれ、涙を湛えながら膨張してきた。

「その籠、何ですか」

ニシ子さんの目がますます大きくなる。見開かれ、剥かれ、ついには白目が黒目のまわりじゅうを覆い、目玉の三分の一くらいが露出したようになった。と思つたら、すぐに元に戻る。

「籠ね。ただの籠よ」

ふたたびニシ子さんの目が大きくなり始める。目玉だけ別個の生き物みたいに、ぐんぐん膨れた。

「蛇じゃないんですか」

「見る？」

ニシ子さんが、見る、と聞いたとたんにもまた目玉は元に戻った。店の空気がいつもと違っていた。コスガさんはいったいどうしたのだろう。ほんとうに人間でないもののようになつて、いざたなく寝ているのだろうか。

ニシ子さんが籠の蓋を開けた。大きな青黒い蛇が一匹、死んだように長くなっていた。「あ」

私が声をあげた途端に蛇は頭をもたげ、ニシ子さんに似た光る目でじっと見つめた。ニシ子さんは薄ら笑いをしている。

蛇よ。サナダさんのところにも一匹いるそうね。聞いたわよ。水くさいじゃないの、教えてくれればいいのに。サナダさんもそういう人だったのね。なんだか安心したわ、なんだかサナダさんが好きになっちゃったわ。あたしはね、これであんが人の好き嫌いが激しいの。サナダさん、そうは思わなかったでしょう。毎日盛り塩をして数珠をつくってそれで昔駆け落ちをした、自分には関係ない人間だと思つてたでしょう。好きにもならず嫌いにもならず、それで毎日普通に過ごしてるつもりでしたでしょう。そうい

う毎日がいいんだと思つていたでしょう。あたしはね、好きになるとずいぶん好きになつちやうのよ。コスガのことだつてずいぶん好きだったわ。でもコスガはあんまりあたしのことが好きじゃないのよね。好きが裏返つて嫌いになつてまた裏返つて好きになつてあと三回くらい裏返つてそれで少し嫌いなよね。でもそういう嫌いの中には好きがまだらにまぶされているから、コスガはすごく気分が悪いんだわ。だから寝てばかりいるのよ。

ニシ子さんは小さな声で喋つた。蛇が籠の縁からつるつる這い出て、ニシ子さんの胴に絡まつた。

ねえ。サナダさんの蛇はどんな蛇なの。あたしの蛇はね、もうすぐ死ぬわ。あたしは悲しくてしょうがない。こんなに愛してるのに。あたしはね、蛇になりたかつた。どうしてあるとき蛇の世界に行かなかつたのかしら。誘われたのよ。サナダさんも誘われるでしょう。蛇は何回でも誘うわ。でもあたしは何回でも断つた。そんな人の道にはずれてやうなことを、しちゃいけないと思つてたのね。人の道つて、自分でも何のことだか分からなかつたのだけれど。蛇はあきらめたのかしら。最後には誘わなくなつた。あれからどのくらいたつたかしら。今ならすぐに頷くのに。蛇の世界はきつと素敵よ。暖かいのよ。

暖かいのよ、というニシ子さんの声が、私の部屋にいる女の声のように聞こえる。まったく違う質の声なのに、同じものが言つてるように聞こえる。そのうちに自分がカナナ堂にいるのだから部屋にいるのだから不明になって、しかし実際のところはただニシ子さんがふわふわした声でニシ子さんの感慨を述べているだけだということ承知している。承知しながら、ニシ子さんの言うことを鵜呑みにしたいのである。鵜呑みにすればすぐにも蛇の世界に行けるのだろうか。鵜呑みにして蛇の世界に入つて知らないふりをして眠つていられるのだろうか。

知らないふり、その言葉を思いつくと急に背中いちめんがぞくぞくとした。ニシ子さんの目玉はもう膨れておらず、いつもの細い一皮目に戻つていた。蛇はニシ子さんの胴に交わらず巻きついてたが、しおしおして艶がなかった。そのうちニシ子さんは喋り止め、カナナ堂はいつものカナナ堂のようになった。蛇の鱗がささくれ立っていた。

蛇といえ、思うことが少しあるのだ。

人と肌を合わせる時のことである。その人たちと肌を合わせる最初するとき、私はいつも目をつぶれない。その人たちの手が私を絡め私の手がその人を巻き、二人して人間のかたちでないような心持ちになろうというときも、私は人間のかたちをやめられない。いつまでも人間の輪郭を保ったまま、及ぼうとしても及べない。目を閉じればその人に溶けこんでその人たちと私の輪郭は混じりあえるはずなのに、どうしても目をつぶれないのである。

目を開けたままその人たちが動いたりそのひとたちが私に對抗したりその人たちが私に屈したりするのを見るだけなのである。

最初のとかが過ぎて何回かその人たちと肌を合わせるならば、次第に私の目は閉じはじめ、固かった皮膚の表面がゆるりと流れだし、そのうちに知らず知らずとかたちが変わってくる。及ぼうと思わなくとも、及ぶかたちになる。

その、ようやく及べるようになったときに、その人たちの姿はいつも一瞬蛇に変わるのである。私が蛇になるのではなく、その人、私の相手であるその人たちが赤や青や灰色やのさまざまな蛇のかたちになるのであった。

それは、いつもそうだった。蛇になる前に肌を合わせることをやめてしまったその人たちもいたが、そうでないその人たちは、必ず一回蛇になった。

なぜ私が蛇にならずにその人たちが蛇になったのか、実際にはその人たちが蛇になっているときには私も蛇になっていたのか、しかし私はその人たちが蛇になった瞬間のぞわりとした粟立つような感じを今でもはっきりと覚えているのである。自分も蛇になっていたならば、あのような粟は立つまい。

夜になれば女は蛇のかたちをとる。この蛇は私を粟立たせたりはしない。女はそのことを、知らないふり、と言って蔑むだろうか。天井で、ヒワ子ちゃん早くいらっしやい、知らないふりをしてないで蛇の世界にいらっしやい、そういう含みでシユルルウの音をたてるだろうか。

コスガさんの影が薄くなっていた。

紫檀の仏壇の扉を開こうとしているコスガさんを、後ろから見たのである。扉に手をかけたコスガさんは、陽炎かげろうを通して見るもののようにうつった。

「コスガさん」と思わず声をかけた。

「何ですか」コスガさんは振り向いて言う。コスガさんの目や鼻や口は色が抜けて、少しのっぺらぼうに近くなっていた。

「どうしたんですか」聞くと、コスガさんは不思議そうな顔をした。

「サナダさん、今日はいやに色が濃くないかい」反対に、そんなことを言う。

コスガさんは仏壇から離れて私のところにやってきた。私の頸をてのひらで何回か撫でた。動物を撫でるようなやり方だった。

「サナダさん、少し変わってきたね」そう言いながら、さらに撫でる。

「サナダさんのまわりの空気がぴりぴりと立ってるよ」

あのあと、ニシ子さんは蛇を巻きつかせたまま、夕方までいた。コスガさんは結局店に來なかつた。客は一人も訪れず、ニシ子さんも蛇もほとんど動かずにじっとしていたのだつた。私は棚卸しの後始末をしたりニシ子さんに教えてもらっている帳簿のつけかたを古い帳簿で復習してみたりして過ごした。ニシ子さんからも蛇からも何の気配も漂つてこなかつた。時間がたつにつれて、ニシ子さんも蛇もますます置物めいた。

帰る時間がくると、ニシ子さんはゆらゆらと立ち上がり、用意してあつたらしい祝儀袋を懐から出して渡した。ポーナス。そう言つて渡してくれた。

渡されて頭を下げ、戸締りのことを訊ねると、ニシ子さんはどちらでもいいように聞いたのであつた。蛇やニシ子さんを背中に感じながら、戸締りをしてニシ子さんのいる場所だけ残して電気を消し、カナカナ堂を後にした。ニシ子さんも蛇も、電氣のつくるスポットの中でふたたび置物になつていた。これがニシ子さんを見る最後かもしれないと思ひながら、私は店を出たのであつた。

思つた通り、それからニシ子さんはカナカナ堂に來なくなつた。

「コスガさん、ニシ子さんの様子はどんなですか」

「だいたいいいんだけど、まだうまく歩けないな。医者はまだ少し動いた方がいいって言

うんだが、おっくうがつて」  
あの翌日、コスガさんがニシ子さんの怪我を伝えたのであつた。階段で転んだのだという。蛇を巻きつかせたまま階段なんか登つたので、足元が不確かになつて転んだとい

う。  
「蛇はね、つぶれたよ」コスガさんはあまり氣の入らない声で説明した。

「つぶれたんで、庭に埋めたよ。ニシ子に聞いたら、そのへんに埋めてくれて言うから」

コスガさんは頼りないふうには首を何回かまわして、それから「よっ」という掛け声と共に近くの寺に届ける数珠の入ったダンボール箱を肩にかついだ。ニシ子さんが作った最後の数珠だった。星月菩提樹の一輪念珠である。ニシ子さんはいつものように丁寧にもその数珠を作っていた。数珠を引っかける棒台に、少し背を屈めるようにして向かいながら、正座をして無言で数珠を作っていた。

「ニシ子は死ぬかもしれないなあ」コスガさんが言うので、驚いてコスガさんの顔を見たら、ますます色が薄くなって、精気が抜けていた。

「まさか」

「死んだらつまらんよなあ」コスガさんは額をてのひらで撫であげながら言った。

線香の匂いが一瞬強くなった、カナカナ堂の空気がざわめいた。何匹もの目に見えない狐みたいな狐でないみたいなのがカナカナ堂の中をよぎったようなざわめきだった。コスガさんはもう一度額をてのひらで撫であげた。

「つまらんから、死なないでほしいなあ」私にともしでもないものにもなくコスガさんはつぶやき、ダンボール箱をかたぎなおして店を出ていった。

その日はそれから一人でお茶をいれて、昼には思いついて天井の上をとり、客の相手

の合間に帳簿をつけた。帳簿をつけながら、蛇のことをときどき考えた。

部屋じゅうに蛇の気配が充満していた。女、ではなく、蛇、だった。

女の姿はなく、卓上には食事の支度がしてあった。今夜はもう女は帰ってこない、そう思った。

引出しを開けるとノートやペンの間から小さな蛇が何匹も這いだした。這いだして私の腕から首をのぼり耳の中に入ってくる。入られて、飛び上がった。痛くはないのだが、外耳道に入り込んだ途端に蛇たちは液体に変わってそのまま奥に流れこむ。冷たい。まだ入り込んでいない蛇を阻止しようとして首を強く左右に振った。振ると、耳の奥で水に変わった蛇が粘稠性ねんじゅうせいを増しながら内耳に向かう。ねばねばとした水が三半規管のあたりを満たす。耳小骨を取り巻く。耳が蛇でいっぱいになり何も聞こえなくなるが、耳の中を粘りながら落ちていく蛇の微かな音だけはいつまでもいつまでも鳴り響く。蛇水は内耳の神経を撫で、その神経への刺激があたまに伝わっていった。あたまの中が蛇に満たされ、蛇のイメージが遠心的に体の各部へ伝わる。私の指先もくちびるもまぶたもてのひらも足のうらもくるぶしもふくらはぎも柔らかな腹も張った背中も毛根という毛根

もすべての外気に接するところが蛇を感じて粟立つ。粟立ちおぞけだつその瞬間が終わると、蛇の気配はいったんなくなり、私は解放される。しかし五分もたてば、間歇的に襲いくるマリアアの発熱のように、蛇の感触が私の表皮を襲う。難儀である。

難儀な体を動かして卓に向かう。こんなになつても食欲はじゅうぶんにあり、私は女の用意した食事を口にする。ほうれんそうのごまよごし。昆布と細切り人參のあえもの。さわらの西京漬。えびいも。白胡椒のかかるしらす飯。食っている間も口の粘膜は蛇になつたり元に戻つたり、忙しいことこの上ない。

蛇などなるまいと念じながら、蛇の用意したものを余さず丹念に嚙んでのみこむ。咀嚼しのみくだしふたたび咀嚼しのみくだし、皿を舐め夜の中で鳴くすべてのものの声に耳を澄ませ、横たわり間歇的にくる蛇をやり過ごし、私は蛇からもっとも遠い地平をめざす。小さく長く細く、あらゆる隙間を探して遠くへ遠くへ私の感触はのびていく。のびてはいくのだが、それらすべてのぶぶんに蛇はまんべんなく含まれ散らされている。まったく難儀である。

ヒワ子ちゃん蛇はいいわよ、蛇の世界は暖かいわよ。声が世界中の空から降り注ぎ、私は降り注いだものでびしょ濡れになる。二段目の引出しにはきれいな色をした中ぐらいの蛇がぎゅーしりと詰め込まれ、あわてて引出しをしめると、番目の引出しが自然に押し出され、中には巨大な蛇がとぐるを巻く。蛇らは横たわる私の体を乗り越え部屋じゅうを這いまわり、飽きるとまた私の体へのぼり体の上で塔をつくつたり筏を組んだりバズルのように嵌まりあつたりする。

ヒワ子ちゃん、ヒワ子ちゃん、いつまで寝てるの。母の声が聞こえ、私は急いで起き上がるとうとするが、それが蛇の毘であるかもしれないと思いつくともう二度と起き上がれない。蛇になぞなつてはいけませんよ、ヒワ子ちゃんはヒワ子ちゃんなんですからね。さらに母の言い、すると反対に私は元気を失つてそれならばすぐに蛇になつてやれという気になる。そうよあたしはヒワ子ちゃんのお母さんだつて最初から言つてるでしょ、お母さんは蛇なんだからヒワ子ちゃんが蛇なのは道理よ。蛇の言い、蛇と母の言い争いが始まる。蛇も母も巨大化しながら果てしなく言い争い、蛇は部屋の中の子蛇やら巻き蛇やらを投げつけては母を縮こまらせ、母は母で慣用語やらおまじないやらを投げつけては蛇をひるませる。

何がなんだかわからぬようになって、私の体はそれでも間歇的に蛇に変化することをやめず、その感覚は次第に違和感のないものになっていき、ならばいつかきつと私のす

べては蛇に変わってしまったのだからかと思われ、涙が流れるような気分、悪さと気分のよさを半々に味わいながら、夜は更けていく。

「サナダさん、ちよつと参つてない、このごろ」コスガさんがコーヒー豆をひきながら、言った。ニシ子さんが寝込んでからはコスガさんが朝のコーヒーをいれるようになっていた。

私は毎夜襲ってくる蛇の気配で睡眠不足がはなはだしい。いっそのこと蛇のもとに下ろうかと思ふこともしばしばだが、私の奥にある固いものがどうしても私を蛇に同化させてくれない。

「ニシ子さんはいかがですか」

コーヒーをすすりながら聞くと、コスガさんは目をしょぼつかせた。

「それがね、思つたよりも回復が早いよ」

コスガさんの色はまだまだ薄い。ニシ子さんは這うようにして布団から出て、赤ん坊が歩くことを覚えるようにつかまり立ちから伝い歩きを経て、今ではもうゆつくりと家の中を歩きまわっているという。

「蛇はもう来ませんか」

「今のところはね」

「ニシ子さんは蛇がいなくても平気なんですか」

「それほど気にしてないみたい」

コスガさんは慥然としている。私のところの蛇は増えたり減ったりしながら毎晩うるさくつきまといてきていた。ニシ子さんは蛇の呪縛からのがれたのだろうか。もう蛇の世界にきつぱりと見切りをつけることができたのだろうか。

久しぶりに甲府の願信寺に納品に行くことになっていた。コスガさんは朝からあくびばかりしている。寝不足ですか、と聞くと、そうだと答える。道中が心配なのでサナダさんも来るか。そうコスガさんが言うので、店は閉めて二人で車に乗ることになった。

願信寺につくと住職が待ちかねていて、また因縁話を始めた。コスガさんは珍しく膝を崩してうわの空の様子で頷いている。二人とも眠くて眠くて、住職の話の途中で何回も上体を傾かせては、お互いにつつきあった。

蛇がな。いつの間にか話はずっと蛇になっていて、コスガさんも私もしかし眠くてそのことにはあまり気を留めていなかった。

蛇の女房をもらつたもんがいてな。そのもんとは実はわしのことなんじゃが。

そこまで言うど住職はコスガさんと私を見つめた。沈黙が一瞬きて、それからまた住職は話し始めた。

蛇の女房はいい。世話女房だ。家の切り盛りはうまいし計算もできる。夜のことだつて絶品だ。癩性のところもないしだいいち無口だ。話を聞くとときにじつとこちらを見つめる目が大きくて白目が澄んでいる。依怙地になるところがないでもないが、人間の女のように感情すくで依怙地になるのではない。からだか元々依怙地にできているだけのことだ。依怙地なだけあつて約束は必ず守る。子供は産めないが卵は産む。産んだ卵は蛇にしかならないが、蛇がそれでかまわんのならわしに文句はない。がんらい子供は好きではないからの。

そこまで言つて、住職はぱんぱんと手を叩いた。しばらくすると大黒さんがこの前のときと同じように蕎麦を持ってあらわれた。髪を低い髷に結つて、黒っぽい着物に割烹着をつけている。

お蕎麦召し上がれ。並べ終わると大黒さんは言い、厨くやに下がらずに一緒に座つた。

わしはもうすっかり蛇になじんだが、ここの二人はなかなかなじめんらしい。住職は

そう大黒さんに向かって言つた。大黒さんは、目を大きく見開いて住職を見返す。なるほど白目が青く澄んで目ぜんたいが潤んでいる。引き込まれる目である。

あの。大黒さんが低いかすれた声で言つた。コスガさんは茫然と大黒さんを眺めている。

導師さま。蛇にもいろいろいるんですよ。大黒さんはコスガさんの方も私の方も微塵も窺わずに、ただ住職だけに向かつて言う。お二人のところに来た蛇がどんなものなのか、その蛇に会つてみなくてはわかりっこありませんわ。

大黒さんが言つたとたんに、部屋の中に並べられていた陶器や古い道具類がかたかたと音をたてた。誰もものを言わない。ひととき大きく揺れていた金具のついた中簞笥が揺れ止むと、大黒さんは立ち上がつて電気をつけた。電気をつけてみると外がずいぶん暗くなつてゐるのがわかつた。まだ午後も早いというのに黒い雲が空を覆い、夜に近い時間のような様子になつてゐた。

まだ誰もものを言わない。中簞笥の引出しがすつと動き、中からたくさんの蛇が這い出た。大黒さんの方に向かつてどの蛇もなめらかに這つていく。大黒さんはいちいち蛇を掴んでふところに入れた。生暖かい風が寺のまわりを吹いている。すべての蛇をふ



ところに収めると、大黒さんはまずコスガさんのところまですすと歩いて行って、コスガさんに巻きついてからコスガさんの顔をひと舐めした。次に私のところに来て同じようにした。

どうですか。こういう蛇はどうですか。大黒さんはかすれた声で言い、住職は満足そうに見守っていた。

どうですかと言われても。コスガさんは顔を紅潮させてしどろもどろに答える。

お気に召しませんか。

気に入るも気に入らないも。こういうことにはなじまないちなんですよ。コスガさんは汗をびっしょりかきながらようやくやく答える。

ではあなたは。あなたの蛇とわたしは違いますでしょうか。大黒さんはその大きな目で私を凝視する。違うのだろうか。蛇なんかにもともと興味はなかった。今だっていたしてない。ただ向こうからやってくる。やってきては蛇の世界に來いと誘う。蛇の世界などには行きたくない。いくら行きたくないと思っても、蛇は後から後からやってきて誘う。そのうちにぐらりと裏返って蛇の世界に行きたくなくなってしまふのだろうか。私の部屋にいる女はこの大黒さんよりもつと瘳猛なものようだ。女に巻きつかれ

ても大黒さんに巻きつかれたときのような落ちついた気分にはならない。しかし女の中には私と同質のものがある。女に巻きつかれたときのぴりぴりした気分の中にとつもなく心地よいものがある。

あなたは。もう一度大黒さんに問われ、ゆっくりと首を横に振った。住職と大黒さんは顔をあわせ、そうしてから大黒さんは次第に薄く引き延ばされたようになってゆき、最後には蛇に変わった。蛇は住職の膝をのぼり、背中を這い、首を三重に巻いた。巻きつかせたまま、住職は新たな因縁話を語りはじめるのであった。

二度と会わないかもしれないと思っていたニシ子さんが、ふたたびカナカナ堂にあらわれた。

「サナダさん、数珠の作り方を教えましょうか。サナダさんあんがい筋がいいかもしれないわよ」などといやに張り切ったことを言う。前のようにてきぱきと口数少なく店をきりまわし、数珠もどんどん作る。一時途絶えていた注文もニシ子さんが戻ったとたん集まるようになり、それにつれてコスガさんの色も濃くなってきた。

晴れた日が続き、私の部屋の蛇はまた女に戻った。女に戻れば、ただの女なのである。

多少蛇らしきはあるが人間らしきの方が勝つ。冬が近いので編み物をしたり布団を干したりする。余つた時間は散歩をして過ごしているらしい。

「ニシ子さん、蛇はもういいんですか」コーヒーをいれるニシ子さんに向かつて訊ねたことがある。ニシ子さんはしばらく考えてから、

「よくないわ。忘れられるはずがないでしょう」と答えた。

「そうですか」

「また蛇が来たらくんどこそあたしは蛇の世界にいつちやうかもしれないわよ」

「ほんとうですか」

「そうねえ。来るのは違う蛇だろうからそのときはまたそのときかもしれないわね」

蛇の話はそれきりで終わりニシ子さんは私に数珠の手ほどきを始めた。

願信寺から帰ってきてから頭の中で何かか鳴っているような気分がずっと続いていた。何かは音ではなく、かたまりのようなものだった。かたまりが振動して、かすかな気配をふりまくのである。ふりまかれる気配は最初何の感慨も引き起こさなかったが、日がたつにつれてせつつくようなものとなっていた。せつつきが強くなるに従つてかたまりは固く大きくなった。

部屋に女はときおりカナカナ堂々で訪ねてきた。カナカナ堂のきれいに纏身上げられた入口のガラスに顔をべったりとつけて、中を覗くのである。最初に気づくのはいつともコスガさんであるが、コスガさんは知らぬ様子をする。コスガさんが気づいてじきにニシ子さんが顔を上げる。ニシ子さんは女を上げしげと見るのである。女とニシ子さんはしばらくしんみりと見つめ合う。ニシ子さんの目が細くなり女の目は反対に大きく広げられる。そのさまを見ていると、私の中のかたまりはますます振動するのである。

「サナダさん、来てるわよ」とニシ子さんは言う。

「入ってもらったら」

私は答えずに、首を横に振る。数珠の珠を通すための糸を不器用に繕よりながら、外の女を見るまいとする。見るまいとするとかたまりはますます振動する。ガラスに押しつけられた女の鼻やまぶたや顔が伸び広がって、そのぶぶんだけ蛇のようになっていく。不思議に女がいるときには客が来なかった。

ほうっておくと女はいなくなる。

女が去った後には何かわからぬ細かな殻のようなものがいくつも落ちていて、ニシ子さんはいちいち丁寧にそれらを掃いた。ニシ子さんに殻を掃かせながら、コスガさんも

私も店の中を右往左往した。師走がじきに来ようとしていた。

「ヒワ子ちゃん。もう待てない」女が言ったのである。言うなり女は私の足を持ち私をころばせた。ころばせたうえで馬乗りになり、首を締めにかかった。

「首なんか締めたら死んでしまう」叫ぶと、女はへんな顔をしながら、  
「だって待てない」と叫び返した。

ぐいぐいと首が締められ、私の表面は紅潮する。部屋じゆうに電気が満ちて、びりびりと震えている。足をばたつかせながら女の隙を窺った。女はじつくりと力強く締めてくる。のがれようとしてもかなわない。

「ヒワ子ちゃんヒワ子ちゃん」女は名前ばかりを言い立てながらますます締めてくる。横目で倒れている床を眺めると、絨毯の毛が横になびいてその間から湯気があがっていた。部屋ぜんたいが沸き立っているのだった。

開け放った窓からいろいろなものが飛び込んできて、馬乗りになっている女に当たる。そのたびに女は髪をふりたてて、当たりにくる金属のかけらやつぶれた果物や鳥の残骸をけちらした。五色の紙吹雪が舞い込んできたときに、女が隙を見せた。すかさず首に

回されていた女の指の間に自分の指を差し込み、てこの原理で一本ずつを膺撃にはずしていった。指がすべて離れると、女はびよんと飛び上がって机の上に乗った。

「どうして待てないの」大声で聞くと、女は眉を苦しげに寄せながら、  
「だってヒワ子ちゃんはいつまでたつても知らないふりばかり」と言い、その言葉がふたたび女を優勢にする。女はひるんだ私の頭に飛び乗り、足の裏で頭頂をぐるぐる撫でる。乱暴な撫で方なのにつつりとさせる。そのまま首をまた締められるかと覚悟している女はそうせずにはますます撫でる。

何百年もの間女とこういう争いを繰り返しているような心もちになっていた。女が攻撃し、私を受ける。

もうその繰り返しには飽き飽きしていた。私の中でこの前から固く大きくなっている振動が、私の輪郭を突き崩そうとしていた。

えい、と気合を入れて女に殴りかかった。こぶしは女の中に柔らかく入り、そのまま吸い込まれた。どこまで殴っても限りがない。深くこぶしが入っていくにつれて、またうっとりする感じがやってきた。目を閉じて女の胸に倒れかかりたくなってしまった。ヒワ子ちゃんヒワ子ちゃんと名前を呼ばれなくなってしまう。蛇に変化して腰を巻かれた

くなくなってしまふ。

目を大きく開けてもう一度こぶしを引き、今度はのひらで女の顔を打とうとした。しかし顔でも同じことだった。打たれても打たれても女の顔は白く薄く、歪みに向かうことはないのだった。

「ヒワ子ちゃん、どうして蛇の世界に来ないの」女がかきくどく。

どうしていいのかわからなかった。わからないわからないと頭の中で言った。しかしほんとうはわかっているのだった。わかっている、それでも痺れたようになっていく。ここで屈してはいけないと思った。思うがかんたんに屈する。屈したいから屈するのだ。屈したいなら屈すればいいのではないか、どうしてわざわざ望まないことをする必要があるの。そう言っているのは自分か女か不明になる。不明だ不明だと考えているうちに何百年ものこの争いが突然ばかばかしくなつて、いちじに結末をつけようという気になつた。

「蛇の世界なんてないのよ」できるだけのつきりとした声で言った。

遂に言ったと思つた。今まで不明にしてきたことを不明でなくした。わからないふりをしていたことをわかつた。ただし何百年も争ってきたわりにはいやに単純なことでは

あつた。なぜ今までこんな単純なことを言えなかつたのか、またわからなくなつた。わからなくなつて、ふたたび単純なことではなくなつてしまつた。

「ほんとかしら」女が笑いながら言った。

「そんなかんたんなことかしら」首を締めにかかる。

たたん、たたん、という音がしている。部屋を満たしている電気のようなものが青く放電しはじめて、そのうちに天井からしたたりが始まつた。したたりは量を増し、部屋が水浸しになる。女と私はあしくびから膝へ、膝から腰へと増す水の中で争いを続ける。すっかり部屋が水の中に沈んでもまだ争いは終わらず、部屋のあるアパートぜんたいが水に飲まれて流れはじめミドリ公園をつつきる濁流に乗りながらカナカナ堂に向かつて、女と私は譲り合わない。

「こちらに来ればわかるのよ。来ないで何を言うの」

「行くも行かないも、そんな世界はないんだから」

「ヒワ子ちゃん、だつてあたしはあなたの母さんなのよ」

「話にならないわ」

「だから話を聞いてよ」

「いやよ」

「聞かなければわからないのと同じよ」

「わかりたくないわ」

「ほらまた知らないふり」

叫びながら、部屋ごと流されていく。もう夜が明けていて、カナカナ堂はシャッターを開けていた。コスガさんは店の前を掃いていた。ニシ子さんは棒台に向かい静かに数珠を作っている。カナカナ堂の前を花や踊り子をぎっしり詰め込んだ祭りの山車がにぎにぎしくひかれ、山車からは信用金庫の歌が大音声で流れていた。だいたいいいい、だいたいなものはあり、その繰り返しが円環のようにカナカナ堂を取り巻き、それでもコスガさんとニシ子さんはカナカナ堂の中で安穏な顔をして何やら、している。サナダさん、練習は大事だよ。コスガさんが流されていく私に向かってウインクしながら言う。練習なんかじゃないんです、練習してる間に掬われちゃいます、そう言い返すが、コスガさんは額をてのひらで撫であげ、両切りのピースをくわえていつものように平然としている。

「ヒワ子ちゃん、いいかげんに目をさましなさい」女が言う。

目をさますのはあなたでしよ」

「そんなこと言って」

女はぐいぐい首を締める。気持ちいいんだか苦しいんだか、女は相変わらずへんな顔だ。それならばと思って女の首を締め返す。

青く放電するものであたりは目も開けていられぬほど明るく輝き、その中でわたしと女は互いに同じくらしいの力で首を激しく締めあう。部屋はものすごい速さで流されてゆく。

文 春 文 庫

蛇 を 踏 む

川上弘美



文 藝 春 秋

著者紹介

川上弘美 (かわかみ・ひろみ)

1958 (昭和33) 年、東京都生まれ。お茶の水女子大学理学部卒業。94年、「神様」で第1回パスカル短篇文学新人賞を受賞。この賞は筒井康隆氏らが中心となって創設され、応募から選考までパソコン通信で行われた。96年、「蛇を踏む」で第115回芥川賞を受賞。著書に「物語が、始まる」「いとしい」「椰子・椰子」「神様」「溺れる」がある。

蛇を踏む